

久留米入城400年記念  
京町校区の見どころ知りどころ  
第3回 京隈小路の成り立ち

京町校区の一部は、江戸時代には京隈小路(きょうのくまこうじ)と呼ばれ、藩士が居住する武家屋敷が立ち並んでいました。

連載第3回は、京町校区の基礎の一つである京隈小路について、その始まりの歴史を紹介します。

今回の話し手の水原さんは、久留米市の文化財専門職員では最年長のベテランです。豊富な知識をもとに、さまざまな文化財の保存活用に取り組んでいます。坂本繁二郎生家の整備から、その後の活用にも携わってきました。

Q. 京隈小路の始まりは？

今から400年前の1621年、有馬豊氏が久留米藩21万石の領主として入国してからです。豊氏は、経隈村(きょうのくまむら)の村人を他所に移転させ、そこを久留米城下町の一部として整備することに

しました。

その年、まず土地の高いところに藩主の菩提寺として梅林寺を創建します。また、「石原家記」という江戸時代の記録によると、1632年に「経隈村だったところに武士の居住地が出来てきた」と書かれています。

Q. 位置や範囲は？

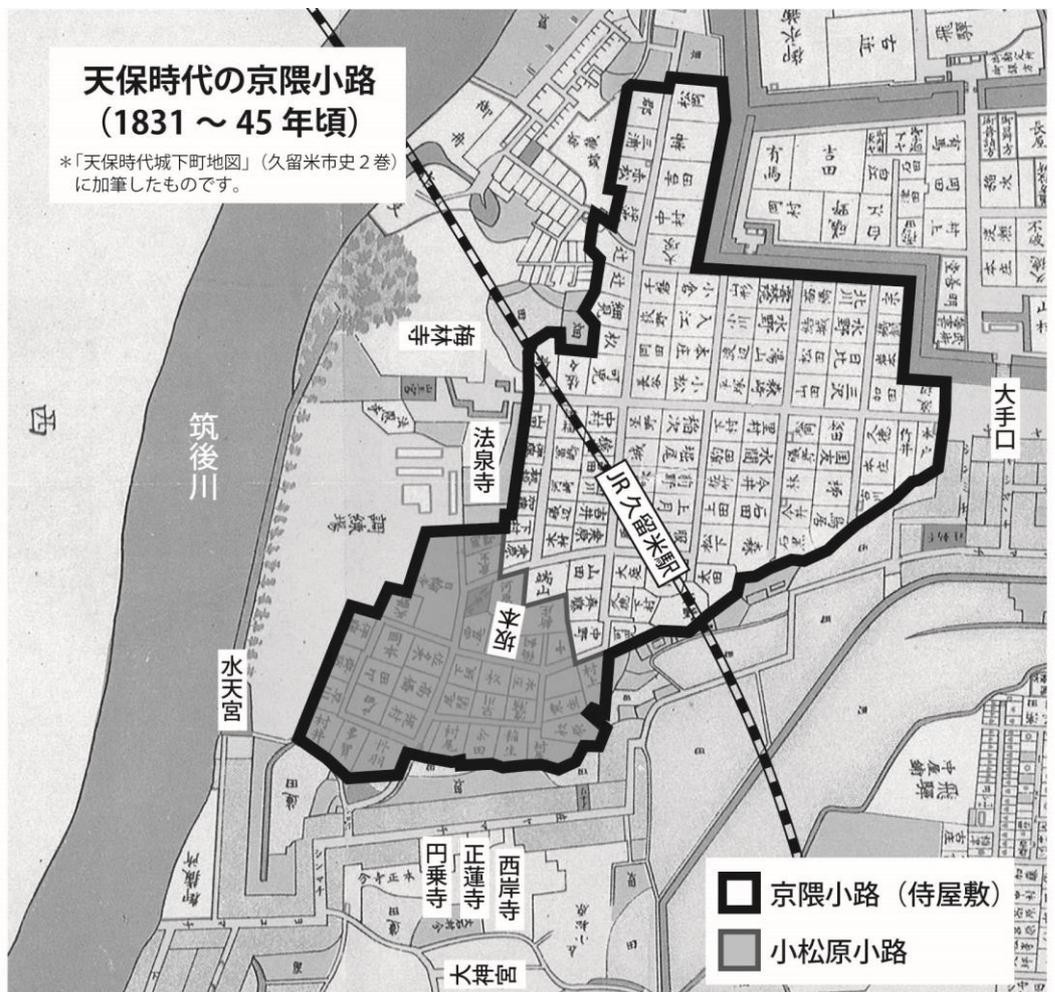
京隈小路は、久留米城の正面玄関「大手口(おおてぐち)」のすぐ西側にあたります。

京隈小路の範囲は当初、北側から整備に着手し、次第に谷地を埋め立てるなどして、南に広がっていったようです。1674年には、現在の京町6・7丁目辺りに、小松原小路(こまつばらこうじ)を増設しました。

1676年には、久留米城内でも低地の柳原(やなぎはら)から小松原小路に、水害対策のため、藩士を移転させています。この頃になると、武家屋敷の数は126軒に及んでいました。

Q. 見どころ知りどころは？

江戸時代の京隈小路の町割り(道



路や土地の区画)が、現在の町並みにも引き継がれているところがあります。道筋や道路の幅は、ほとんど当時と同じで、城下町の面影をよく残しています

\*

古地図をたどって歩いてみると、城下町の時代がより身近に感じられそうです。

(聞き手・文化財保護課 穴井)